

## 平成 18 年度鳥取市政懇話会 第 1 回地域づくり部会議事要旨

日時：平成 18 年 5 月 30 日（火）午後 2 時 40 分～3 時 30 分

場所：鳥取市福祉文化会館 3 階会議室

出席者

【委員】下石委員、神部委員、木村肇委員、田中英教委員、西尾委員、乾委員、谷口委員、  
八村委員 <欠席 田中仁成委員、久本委員、福島委員、三田委員>

【鳥取市】竹内市長、津村企画推進部長<事務局>羽場企画調整課長、高橋スタッフ

協議内容

部会長 それでは、地域づくり部会を開会します。

平成 18 年度、もう 1 年任期があるようですので、皆さん 1 年間それぞれ御尽力、御協力いただきたい。

先ほどはあまりいい話が聞けなくて、ちょっと出ばなをくじかれたような感じがしていますが、ただ最後に、私もそう思っていました、やはり中山間地域の自然資源を生かした一つの地域づくりに多少は魅力のある動きが出てくるのではないかと指摘もあり、やや少し救われた感じがしました。もう一つは、観光対策一つとってみても、大々的なものを期待するというものはなかなか難しいのかなど。少しずつ場数を踏んで、地道に積み上げていく方が一つの行き方として求められるのではないかと感じましたので、今日のお話は、そういう大きな波という確かに難しい問題を我々は受けざるを得ないと思えますが、小さな波は何とか自分たちでやっていけるものがあるのではないかと理解しました。また皆さんにいろいろな知恵を出していただき、よりよい地域づくりができる体制をお願いしたいと思います。

それでは、若干事務局から報告事項があるようですので、そちらから先に入らせていただきます。

事務局 まず、欠席の報告をします。三田副部会長、久本委員、福島委員はいずれも所用のために欠席するという御連絡をいただいております。もうおひとり、日本海新聞の畑山委員の後任として今年度から田中仁成さんに委員として御了解いただきましたが、今日は所用のために欠席するという連絡が入っております。以上が欠席の報告です。

それから、18 年度の協議テーマとスケジュールを報告させていただきます。これは事務局と部会長とで協議をさせていただき、このような形で案として出させていただきました。3 月の部会の議論と、今日の全体会での市長マニフェスト、とっとり総研の講演等を踏まえた上で、地域づくり部会は大きなテーマとして「中山間地域の振興について」、特に中山間地域でも合併地域をメインテーマとさせていただきたいと考えております。また、サブテーマとして、2 つのテーマ、まず「鳥取自動車道開通後の中山間地域の振興」と、もう一つが「地域コミュニティの充実強化」について 5 月、8 月、11 月の 3 回に分けて議論していただきたいと考えています。もう 1 点はタイムリーな話題として、「総合支所についての充実強化」について、6 月議会にこの予算が提案されておまして、それが決まりましたら 8 月にでも、総合支所について皆さんの御意見をいただきたいと考えておりま

す。以上が協議テーマ及びスケジュール案の御報告でございます。

部会長 どうもありがとうございました。今事務局から 18 年度のテーマの報告がございました。それでは、市長さんの方から何か一言。

竹内市長 私は間もなく失礼しますが、まず第一に、ここに出ている中で「中山間地域の振興」ということがあります。鳥取自動車道の開通後というのはメインの大きなテーマになってくると思ひまして、これは他の部会でも恐らく議論されると思ひますが、その中で、8月ぐらいから出ています「地域コミュニティの充実・強化」、これは全市にわたる議論であります。地域づくり部会では市民との協働ということで大変重要な課題なので、ぜひ考えを深めていきたい事柄だということと、それから「総合支所の強化」というのはちょっと表現が正確ではなくて、地域振興機能を高めることについて各総合支所、地域審議会あるいは各地域の中で議論することが重要だと考えております。地域振興というテーマは、総合支所の区域の中だけの問題ではありませんが、合併後地域振興機能が低下しているのではないかと感じられる点があるので、そうした地域自らが地域振興について住民と一緒に考えていく、組み立てていくというあたりを考える必要があります。中山間地域の振興につながっていくと思ひますので、公民館などを拠点とした地域のコミュニティ活動の充実・強化に関しまして、現状、課題、そして今後の方向性などをぜひ取り上げて御議論をいただきたいと思ひます。先ほどマニフェストの説明でお時間をいただきました。戦略的にこれからの鳥取市の発展、活性化を進めたいと念願しておりますが、各部会で議論される中身を踏まえて、やはり私だけでは知恵が回らないところを補っていくような点、あるいは知恵だけではなくて行動ですね、委員の皆さんにはそれぞれ地域地域で重要な役割を果たしておられますので、行動の面でも鳥取市の今後の活性化を支えていただきたいと思っております。

それでは、申しわけありませんが、後は部長に市の代表を任せまして、失礼させていただきます。

部会長 御苦労さんでございました。

それでは、早速協議に入らせていただきますが、先ほど事務局の方から、テーマを絞らせていただきましたので、基本的にそのことについてはいかがでしょうか。御異議ないようございましたら、これをひとつテーマとして、先ほども市長からも話がありましたように、それなりの幅の広さはその時々で御判断いただいて、それぞれ議論していければいいと思ひます。

テーマも定まったところで、たまたま部会にも中山間地域の委員さんがおられますので、ぜひここで思いをお話していただいているいろいろ御認識いただくこともありましょうし、課題として取り上げていただけるものもあるかと思っております。3人の方にそれぞれの地域について、姫鳥線の開通にける思いと申しますかそうしたものもいいますのでお話をしていただき議論に入っていきたいと思ひます。それでは佐治の方から、委員 では簡単に現況から報告しますが、御承知のように佐治町は市でいうと一番南西に位置しており、中山間地ではなくて山間地と言った方がいいと思ひます。境界は三国山という 1,262m の山があります。これは以前に伯耆と因幡と美作の境にあるということで三国山という名前だと思ひますが、分水嶺ですので、一部は瀬戸内に水は流れますし、一部は日本海、それから一部が佐治川を經由して千代川から賀露に出て砂丘を形成する土砂が流れるということだろうと思ひます。

今一番の問題が、少子高齢化の波に洗われていて、今回の国勢調査でも5年前に比べて1割の人口減少ということで、高齢化率が35%程度で、今発表されています全国の人口推計によると、2050年の我が国の高齢化率が35%ですので、40年くらい先を現在走っておるとい、言ってみれば難儀なというかどうにもならないというか、そういう現状です。一番高齢化率の高い地区は、やはり岡山県境に近いところでして、50数%、それから一番低いところは、やはり用瀬町に近いというか鳥取市街地に近い方で、10数%、20%くらい。集落が27ありますが、一番標高の高い集落が500m、一番低い集落は100m、そういうところ。御承知のように非常にV字形の急峻な地形ですので、産業としては二十世紀梨を中心とする梨の生産なのですが、傾斜した園、平たんな園はない、雑木山を切り開いて果樹園にしたというところですから、現在は御多分に漏れず後継者難ということで、最盛時の半分以下にまで落ち込んでおりますが、農業生産でいうと梨の生産が一番多い。合併した鳥取市の中でも生産量は断トツに多いが、標高が高いということもあり出荷が一番最後まで続く。鳥取県内で一番最後に出すのは佐治の梨、ということですので、シーズンオフになりましてから進物の注文が来たりというような。値段でいいますと、困っているのは初めに出される東郷とかの梨が高いわけですね、市場では。後になるほどだんだん下がってきて、下がったところに佐治の梨が出ていくということですので、どうにもちょっと調子が悪い。それをずうっと続けているというのが現在の状況で、そういうことで所得が上がらないということがあって後継者難となり、それが人口減につながるという悪循環の地域です。

実は昨年に国土交通省の事業なのですが、国土施策創発調査事業があり、鳥取市がそれを受け白羽の矢を佐治地域に当てていただいたのです。これは北海道の美瑛と山古志村と鳥取市の佐治という3つの地区が調査対象になり、ちょうど今日発表すればいいようなことをやってきたわけです。実は17年度でこの調査事業は終わりだと思っておりますが、私の地域としてはせっかく調べていただき、課題も出していただいてこれからの方向も調査に入っているものですから、調査が終わったからはいさようならではなく、これを何とかこれからの地域づくりに生かしたいという思いがあり、今日このネタに今話させていただいているところです。

平成7年ごろから、佐治も和紙をつくっています。佐治の和紙は画仙紙に物すごく固執しておられまして、今はほとんどがそうですが、その振興を図りたいということと、それから梨ですね。先ほど言いました1次産業では梨が一番大きな生産高があるものですから。それから、アストロパークをつくっているように星空がきれいだということで、和紙と梨と星とあと佐治谷ばなしの「し」と、佐治石の「し」と5つの「し」をもじって「五し」の振興を図るということで、へ理屈をつけてやってきたわけです。

その中で、飯の種になるのは梨と和紙ですが、これが今のところは上手にいけない。佐治谷ばなしというのは、いわゆるばか話、とんち話でして、佐治の人は以前から非常にコンプレックスを持っておりまして、鳥取に出たらいじめられたとか何とか言ってコンプレックスを持っておられたのですわ。それではいけないということでいろいろやって、今は語り部も増えてきてまして、一番うれしかったのは女性の方が元気を出して語り部をやってくれておりまして、以前は男性だけだったです。京都にあります大蔵流というのですか、茂山という狂言にお願いに行きまして、佐治谷ばなしを狂言にしてくれということで3つしてもらったのです。県民文化会館でも1回か2回、演目に加えていただいたのです

が、そういうことで、佐治谷ばなしの方は割とにぎやかになってきて、今は外から来られたお客さんに話をしたり、出前にあちこち出かけたりする状況にまでなりました。

星はいわゆるアストロパークですが、佐治の天文台は非常に運営費がかかっておりまして、財政的には鳥取市に御迷惑をかけているかもしれませんが、天文台の世界では割と有名になっており、全国区でやっています。去年、日本経済新聞の「何でもランキング」で「星を見るならこの天文台」というランキングをとりまして、2位になったのです。1位が兵庫県の佐用にある西はりま天文台公園、2位がアストロパーク、あと群馬の、これは国立だと思いますが、天文台ということで、非常にいい位置につけています。

宿泊施設をつくっていますが、ここに泊まられるお客さんは大体関西、大阪とか神戸、それから岡山が総数は多くないが割合が高いですね。あとは単体でいえば鳥取県の東部が多いのですが、関西というくくりでいくと一番多いです。やはり自家用車が多いのですが、いわゆる姫鳥がつくと時間距離が短くなりますので、私はお客さんに来てもらいやすい条件は整うなと思っています。それから、天文台の研究者が大阪の海遊館という水族館の前庭で1年に1回、冬の間に出張観望会をやっています。うちの職員だけでは足りないので地元の天文愛好家に手伝いをしてもらって毎年やっています。そういうことで交流はやはり関西が強いということがあって、やはり道路事情がよくなったら比較のお客さんの利便性が高くなると思っています。

佐治石のことは、これはもう取ってはいけませんので、現在の位置に保存ということで、お金にはなりません、自然保護みたいな観点でやっています。

調査事業の中で、実はワークショップが取り入れられていまして、今3回ワークショップをしました。それで、参加者は大体40代、50代が中心です。男女の比率が半々ぐらいです。それで、これからこの地域をどうしたらいいかということで、4組ぐらいに分かれて今いろんな議論をしており、まだ集約には至っていませんが、浮かび上がった課題が2つありまして、1つは梨なら梨、和紙なら和紙、いろんなことを一生懸命やってはもらえるのですが、それをお互いがよく知らないわけです。それを地域のみんなが情報を共有するというのをしないと、今の壁が破れないのではないかとということが問題点に上がっています。もう1つは、全体としてこの地域のことを考えてどういうことができるか、するかということを継続して取り組む組織がないと、つい言い散らかしになってしまって、力が発揮できないということがあり、今年度のやりたいことは、組織をどうしてつくり上げるかということにきています。姫鳥はもちろんいいチャンスですから、それを念頭にするわけですが、とても一朝一夕にできるわけではないので、何か取り組むにしても継続して地道な取り組みをしないとどうにもならない感じで、そうした取り組みを18年度にスタートできるようにしたいということです。

大変取りとめもない話ですが、さっき市長がお話しになっておりました地域振興のためのプロジェクトチームというのですか、それを各総合支所単位につくって方向を定めてという話も出ていますので、これをちょうどうまく使わせてもらって、ぜひやりたいと。私は合併をする際に、やはりこうしたことがなくなることを懸念したのですが、議会といういい悪いは別として、その地域を何でもかんでも議論する場がなくなってしまいましたので。地域審議会もありますが、それはまたちょっと別の機能を持っておりますので、やはり今言ったようないろんな人が集って、これからのことや今のこと、いろんなことをわいわいがやがや言いながらやっていく組織ができれば非常に活気が出てくるのではないかと

という思いがしておるところです。

以上で終わらせていただきます。

部会長 ありがとうございます。それでは、続けて話をさせていただきます。鹿野の方でお願いいたします。

委員 中山間地域の振興ということがテーマになりまして、5分ほどしゃべってくれという事務局からの依頼がありましたので、いいですよと言いましたが、今の佐治の下石さんの話を聞いていますと、佐治地域全般の振興という面で話をされたことを聞きまして、さすが前村長さんだなあと感じて聞かせてもらいました。私は、うちの小さな村がどういう生きざまをすれば本当に残っていけるのかということについて少ししゃべらせてもらおうかと思っています。

うちの集落は鬼入道、鬼が入る道と書くのですが、この集落は昭和の年代まで25戸という戸数がずっと続いていたのですが、これが平成に入るちょっと前ぐらいから1軒減り、2軒減りという形で家がなくなりました。なくなったというのは、便利のいいところに土地を求めて家を建ててという形の家庭と、住んでおられた老人が亡くなられて、それで跡を継ぐ人がいないという形で家がなくなったという家庭も含めて6戸減り、今は19戸です。やはり村に魅力がないということが外へ出られる一番大きな原因でして、これは何とかしなければならぬという気持ちを抱いたのが、私が議会に出るようになってから特にそういう気持ちを持つようになりました。

平成6年から、鬼入道の集落から400mぐらい奥になりますが、棚田をつぶして、そこから出る岩を残してオートバイのトライアル会場をつくったのです。これは集落がつくったのではないのです。集落に住んでいたトライアルに関心の強い若者が自分の家の田んぼや自分の本家の田んぼを買って、それを重機でつぶしてトライアルで駆けずり回れるような競技場に仕上げたのです。それから、西中国転戦大会というのが年に2回行われるようになりまして、平成15、16年の2年間、今度はこれが全日本転戦大会を開くまでになりました。これを集落の村づくりの核に据えようではないかということで、「トライアルの里づくり」と銘を打って集落が全面協力をしました。それで、だんだんとそれが育ってきたといういきさつがございます。

私はそういう人たちと接することによって、一番要望したいなあということが、その当時までは公民館、いざというときにはみんなそこへ集まるのですが、公民館が2間と4間の小さな建物だったのです。それで、集落は最初25軒ありましたから、25人が集まって会議を開くだけでいっぱいだったのです、広間が。これではだめだなと、これでは外部から来られた人とひざを交えて話す機会もないし、集落から1軒1人しか集まらないと男ばかり集まってきますから、総会は男だけということで、家庭の女の人に総会の意思が伝わりにくいという部分がありました。それを何とか解消したいなと、そのためには、やはり50人ぐらいは入れるような公民館が欲しいという気持ちを抱いていました。たまたまそのときに議会の総務常任委員会で岡山県の小さな集落に、村づくりを非常に活発にやっておられるという話を聞いて、行政視察に行きました。そこも鬼入道と似たような小さな集落だったのですが、その集落の方が何をやったかといいますが、山間部ですから人が見るものをつくらなければならないということで、水車小屋をつくったのです。昔は私たちの集落にも水車小屋はあったのですが、今は水車小屋で米をつくことはもう全然やりませんが、そういう水車小屋を3棟建てたのですね、自分たちの力で。一銭も補助金をもらわず

に。自分たちの集落で持っている山から木を切り出して、大工さんも村の大工さんに頼んで仕上げたのです。すると、お客さんがよその方から村に来られるようになった。それで、今度はその村の行政が何とかしてやらなければいけないということで宿泊施設をつくったのです。もっとも大きな宿泊施設ではありませんが、村の古い家を改造したもので、2階と下にせいぜい泊まっても7、8人ぐらいしかないという小さなものですが。

感銘を受けましたね、よくこうやって小さな村でこういうことができるものだ。やはり考え方でやればできるのかなあという気がして帰ったのですが、それをもとに平成9年からだったと思いますが、県のうるおいのある村づくり事業がありまして、鹿野町も取り組んでみないかということで、手を挙げて、都市交流センターという、いわゆる都市の住民と交流する場所が欲しいということ为主要テーマにして、うるおいのある村づくり事業にのせていただきました。それと、農産物の加工施設が欲しいということで県にお願いをして、3か年かけてつくっていただきました。工事費2,700万円を県と、その6分の1を集落が負担して、現在の都市交流センターという集会場と加工施設を合体させた建物をつくっていただきました。

それによってトライアルに来る選手、大体1回に来られる方が70名から80名、それには家族がついてきますので、非常に集落がにぎやかになるということがあったのですが、泊まる施設がないものですから、朝来て晩に帰ってしまうという格好でしたので、何とか交流センターができ上がったらそういう人との交流をやりたいなあということで交流をやりました。一晩お酒を飲みながらいろいろと話し合いをしました。

そういうことを一つの村づくりとして考え、そして外部から来られる若い者と話し合いをすることが村の人の考え方を変えました。それまでは、村づくりというのは行政に頼っておればよいということで自分たちが汗を流して金を出してもものをするという意識は全然なかった。それが、そういうことで意識が変わるようになってきました。おかげさまで、平成9年から平成12年までかけてうるおいの事業をやったのですが、それで交流センターができて平成14年から今度はグリーンツーリズムの民泊事業というものに取り組んだのです。現在、一番村づくりの核に据えています。これが14年から始めて大体昨年度までで民泊された方が500人余りあるのではないかと思います。

この民泊は家族連れが多いのですが、こういう方が来られて、家庭でそれを受け入れて、くつろいでいただく。大体1泊で帰られます。民泊の受け入れ家庭は、最初に、くつろいでいただける雰囲気づくりに心配したのですが、来られる方は鬼入道の何がいいのかというと、いわゆる手をつけていないそのままの自然がある。そういう自然の中で、農業体験に限らず、山菜とりなどの自然体験ができる。そこに行けば都会で疲れた気持ちが田舎へ行って少しは癒せるのではないだろうか、そういう気持ちがグリーンツーリズムの民泊に結びついているのではないだろうか。ごちそうを食べに来られたわけではない。料理づくりはおばあちゃんが専門でして、おばあさんが今まで伝わってきた田舎の味の料理をお出しし、それを食べていただく。そしてできればその料理と一緒に台所に入ってつくっていただく、話しながら。そういうことが後から後から来られる人の共感を呼んだのかなあという感じです。

高速道路にどういうことを期待されるかですが、外部から来られる場合は交通の便がまず大事だろうと思います。今、鬼入道に民泊で来られる方は、関西から東京圏の方あるいは外国の方も2度見えられたこともあります。大体東京から関西ということになると自

家用車で来られます。やはり時間短縮するともう少し田舎が売り出せるのではないかという感じがします。高速道路がついて、さっきの商売の話でプラスとマイナスとどっちかという話もありましたが、グリーンツーリズムについてはマイナス面は余りないと私は思っています。プラスにつながる、もちろんプラスにつなげたいと思っています。こうした地域づくりというのは、そこに住む住民が自分たちの地域の魅力を再発見しながら、自分たちで考えた地域づくりをするという意識がないと、山間地集落はだんだん消えてなくなる可能性が高いのではないかという気がしています。今後うちの集落はまだ高齢者しか住んでいない家庭が何軒かありますので、まだまだ減る可能性はありますが、今いる若い者に、自分たちの村は自分たちでつくろうやという機運ができてきているという気がしていますので、消える心配はないのかなと思っていまして、これを残していきたいと思っています。以上です。

部会長 ありがとうございます。それでは、続いて青谷の報告を。

委員 先ほどの佐治、鹿野と、まちづくりとしては、具体的な事項は違うにしても方法論等は同じだと思います。青谷の場合は、資源としては青谷のいわゆる長尾を中心とした海岸、鳴り砂、そういう自然環境、それと伝統文化・産業としての日置の和紙があります。近年は上寺地の弥生遺構といいますが、遺物が相当レベルで輩出されていますが、それをここで述べても時間もないですし、青谷の和紙工房をつくりましたときの経緯をお話させてもらいたいと思います。

もともと旧青谷町は、ちょうどV字といたらいいのですか、青谷が中心にありまして、東に日置の谷、西に勝部の谷があります。各々が青谷との交流はあるのですが、日置と勝部の交流はほとんどなされていない。また、こういう中山間地は大体そうですが、定住人口が確実に減ります。これは出生数を見れば人口動態的にもわかることです。それで青谷も定住人口をふやすことは、まず不可能ではないかと認識しました。そうであれば交流人口の拡大を図る。そのためには、では一体青谷の顔は何だろうと。その当時はまだ上寺地は発掘されていなかったのですが、それでいろいろ議論いただいた中で、結局、町外・県外に出たときに、「青谷は？」というときにはやはり「和紙」が話題になるのではないだろうかと結論に至りました。それなら、「和紙」を核とした施設をつくらせていただきたい。それも、できれば道の駅的ないわゆる一般的なものではなく、便利は悪いのですが、本物のおいのするところに本物をつくらせていただきたいと。同時に、先ほど最初に申し上げた町外・県外との交流、町内での地域間交流、それと和紙産業の育成という、大きく3つの柱で向かったわけです。

それで、当初は今の大体2倍ぐらいの規模で、日本デザインセンターの原研哉さんをプロデューサーにして、隈研吾さんの建物でということに向かったのですが、いろいろなお考えがありまして、結局予算規模も半分落ちて、半分に落ちてでも原先生も隈先生も了解なされていたのですが、それでも非常に強硬に反対される人があって、もうにっちもさっちもいなくなりました。頓挫してもう一回委員会を再立ち上げて、結局地元的设计士に設計をいただいて、本来の文化施設から産業施設、地域の交流施設に近いようなものに、趣旨がやや変わりました。発足して今に至って4年が経ちました。当初は年間入館者を、2万人ぐらい想定しておりましたが、初年度が2万弱ですかね、それが今は1万5千人ぐらいで、大体下げ止まっています。

ただ、残念なのは、私どもが見ていて非常に身近なもので済ませるようになってきてい

ます。当然鳥取市からも、予算に対する制約等もありますが、かなり手近で身近な県内の作家とかを続けておれば結局は本当にローカルな施設になってしまう。せっかくこれだけの思いでつくったのであれば、8億近いお金も投じたわけですし、もう少し踏み込んだ形で何のためにつくったのかを再度検証し、因幡の一つの顔として東京ぐらまで情報が発信できるような施設にするべきだと思います。企画展をするにしても、今は学芸員が1人もいません。今のままですと私はじり貧になっていくのではないかと思います。もし、道の駅であればそんなに8億もかけなくても2、3億で十分だったわけです。ここはこういう要望を市にお願いする場ではないですが、何とか学芸員に参与していただきたい。でなければあの施設は多分最終的には農産物を売ったりとか、道の駅に似たようなものになってしまうと思います。それであれば、つくった趣旨から随分外れてしまいますし、そんなものだったら日本じゅういくらでもあります。やはり青谷の和紙工房もおもしろいし、美濃の工房もおもしろいというような、日本や世界のレベルで口の端に上るような施設として維持すべきだと思うのです。

今までは地域の施設だったのですが、鳥取市の施設になったわけですから、もう少し地域の伝統文化・産業の拠点として鳥取市も活用していただきたい。それで、姫鳥線との絡みになりますが、姫鳥線はそういった意味では地域のそういう文化といいますか、物産といいますか、それは人を引きつける大きな魅力でもあり、これからはさっき乾さんがおっしゃったようにグリーンツーリズム、エコミュージアム的な自然も非常に大事で、さらに文化、歴史も非常に大事になってくると思うのです。そのときに、他に負けないというか、他とは違う独自性を持った和紙工房のあり方を模索していければと思います。私どもが今まで和紙で地域の方の100%の拍手をいただけないというのは、和紙業界もやはり紆余曲折あって、もう和紙の顔は見たくないという、事業を止めていかれた方や、出稼ぎに出られた方も大勢おられます。川は和紙の排水で少し汚れました。日置川は水量が少ないものですから。それで一昨年市と県の補助をいただきまして、一応国のBODの規制が120ppmなのですが、それを大変な目標値なのですが30ppm(農村の集落排水のレベル)にすることで、現状クリアしております。

そうしたことも含め、我々としても地域の方にかわいがられ、誇られるような産業でありたいと思っております。地域が発展するためには、地域に住む人が地域への愛着、誇りを持たねばなりません。和紙もこれだけの歴史があるわけですし、是非とも地域の人に可愛がられ、愛着・誇りを持って外に発信していただきたいと思います。それが青谷地域のまちづくりの素になります。今から取ってつけたようなものを作り出すよりは、やはり先人が残してくださったものを我々が未来にどう残していくかということの中で青谷の発展を考えていきたいと思っております。先ほど申し上げましたように、上寺地も大きな存在です。あとは勝部地区の場合は地域景観の保全を含めた農業というものの核に、生きがいの一部としての部分も含め、やっていけるような地域として残っていくのではないのでしょうか。

青谷というのは、商業がそれほど強くなく、工業もある町なのですが、姫鳥線の開通を大きなプラスとして、自然環境・和紙・上寺地を中心に、大きな特質・魅力・文化を発する地域として、これからの私たちの努力次第ですが、多くの方々において戴き、交流を深めて発展し得る地域だと思っております。

以上でございます。

部会長 ありがとうございます。



それでは、今御三方にいろいろ話をさせていただきまして、中山間地域の振興にかける思いをいろいろおっしゃっていただきまして、もうちょっと時間がなくなってきましたが、今お話をお聞きになりまして何か御感想があればお話いただければと思いますが。

総じて、おっしゃったように本来的には確かに人口が減少して、少しずつ集落とか、あるいは佐治でも青谷でもそうでしょうが、少し活力がないと言われておるのですが、それなりにまだ底力を持っている部分があるのですよね。そういうものがうまく表に出ていないというのが実態でございます。そんなふう思うところでした、これを何とか引き出す道を考えていく一つのワーキングではないかと思っております。実際にやればうまくできるものを持っているとは思っているところでした、姫鳥線を一つのきっかけにしますと、そういうものが目につきやすいような状況が出てくるのではないかとということが一つの期待。現在やっているものが少しでも世に出るチャンスが出てくるのではないかなと、これはやり方にもよりますが。やり方によってはチャンスがあるのではないかなという気はいたしております。特に、おっしゃってありましたように、一つは自然の資源というものがこれからやっぱり脚光を浴びるのではないかなと思っております。

最近いろいろな情報を得ていますと、グリーンツーリズムと同時に、健康ツーリズムというのがやっているのだそうですね。要するにどこかに行って健康を求めるといのが、これは旅行会社も企画をしている地域があるのだそうですね。要するにあそこに行って何かすると健康にいいとか、そういう宣伝が出るのだそうですね。一つの例ですと、森林浴ですな、そういうところに泊まって、何日か森林浴をして帰ると健康にいいとか。それから、食べ物を一つとってみると要するに健康にいい素材がありますが、そういう食べ物をつくって宣伝して、食べたら健康にいいと、そういうことも少しずつ芽生えています。それには、一番の条件は自然景観とそういう素材が要ということでしょう。そこらあたりを見ると鳥取県にないかなあと思ったのですが、何とかありそうな気もしますけどね、一つは、そのあたりを見出すものがないかなあと思っているところです。

それから、乾さんもおっしゃったが、本当はやればできるのですが、やろうするものの取っかかりがないですね。

津村企画推進部長 今、発表していただきましたが、合併をしまして、旧鳥取市の方は合併しても余り変化を感じておられないと。ところが、合併した旧町村の方は大きく変化して、それもだんだん寂れていくというか、そういう意識があるという声も、特に市長選挙をしてみて、旧町村部の方から大きく聞こえてきたというようなことがございまして、今事務局が最初に申し上げましたが、これから議会で審議していただくのですが、各旧合併町村の公民館単位をまず基礎としまして、少ないところは約40万円、それから多い町村は60万円ぐらいの予算をつけまして、さっき言われたようにそれぞれの地域はまだ力を持っていると思いますので、各総合支所を核にしまして、自分たちでこの地域をどういうふうにやって村づくりを、あるいはその地域づくりをしたらいいかというのを考えていただくという予算を6月補正にかけているところです。

ですから、もうそれぞれの地域で今おっしゃられたようなお話もありますし、下石委員が言われたように、やはり自分たちで一生懸命やっていこうという地区もありますし、それから鹿野町も言われましたし、そういうことをこれから1年間かけてやっていただくと考えておりますので、それぞれの地域でどういうお知恵を出していただくか、言ってみれば、ひょっとしたら競争みたいになるかもわかりませんが、それぞれの地域で頑張っ

考えていただけたらと思います。

委員 私が一番心配しているのは、私のところも、うるおいのある村づくり事業がかなりあるのですよ、実際に。ところがその地域の人たちは、よその地域がどういうことをしているか知らないのです。要するに競争心が出てこない。今言われたような鬼入道の話にしても、佐治の話にしても、それから青谷の話も知りませんから、要するに競争心がわかないのです。自分のところだけ何とかしてくれということです。それが強いですからね。だから、もうちょっとそれを広げられないかということです。そうすると、あそこには負けられないとか、ここには負けられないと、そういうところが出てくると思うのです。

津村企画推進部長 今年度はこうしたことで、特に合併町村に予算をつけたわけですが、市長の公約、マニフェストの中にもありますが、「それぞれ地区公民館の充実を図って、それこそ地域の自治会や市民団体が行う、いろいろな活動を強力に支援します」というのは、旧鳥取市も含めまして、これから各地区公民館でいろいろ知恵を出していただこうと思っております。

委員 佐治地域の方で5つの「し」について話をされまして、いろんな話、初めて聞く話もたくさんあったのですが、佐治の梨は時期が一番最後という話は私も知らなかったのです。私はやはりよそに進物で送るのは一番最初の東郷梨とブランド化をしていますので、まずあそこに行ってしまうと、こういう悩みがあるのだと、思いっきり時期をずらすということではできないのかという思いがありました。

それともう1点は、アストロパークは非常にいい施設ですが、余り活用されていないし、県内での知名度も低い。要は天体ファンが少ないということですよ。一部の人には非常に知名度があっても、一般の県民には知られていない、関心度が低い点が集客できない、収入につながらない部分だと思うのです。

例えば県内、市内の小学生を対象に何かイベントをして、今回はこの小学校を招待する、今回はこの小学校を招待するという形で、天体ファンを増やすために少年少女たちを対象にそういうイベントができないものかなということを思いました。

それと、鹿野地区の鬼入道は、もう何回もニュースで取り上げてやっておられるので、有名です。

委員 ああ、そうですか、ニュースに出ているのですか。

委員 はい。グリーンツーリズムを毎年しておられて、よくテレビで見ているのです。どこかのツーリストが何かを紹介されて、関東の方からも来られているみたいですが、どういうルートで。

委員 最初は行政が表に出て、こういうことをやりますから来てみませんかという宣伝をしてくれたのです、一番最初は。それから以降は、今度はこちらの集落に事務局をつくりまして、事務局に電気屋さんがおられて、もう全部広告宣伝をしてくれたのです。

委員 インターネットを使ってということですか。

委員 そうです。

委員 では、ネットで個人的に単独で来られるのですか、どこかのツアーとかいうのではなくて。

委員 いやいや、いろいろあるのです。家族で来られるとか。

委員 何かバスで来ていたこともありましたね。

委員 ええ、そうです。ああいうバスで来られるのは、東京の武蔵野市等。

委員 東京の方からバスで来るのだと思ってちょっとびっくりしたのですけどね。

委員 そういうのもありますし、個人で来られるのもあります。友達と何人かのグループで来られたりいろいろあります。事務局にそういう情報が入ってきた場合に、事務局がいいですよと受ける場合もありますし、何でもかんでも受けるのではなくて、受け手の都合が悪い場合もありますので、そういう場合はお断りをさせていただいたり。とにかく集落の受け入れる方が無理にならないように、家を増築したりとか新しい布団を買ったりとかはしないで、自然に対応ができるような形で、とにかくあるものでもてなしをしましょうということなので、それだから続いているのではないかなと思っているのです。

鹿野町も最初はうちだけではなく、もう一つ手を挙げた集落がありました。90戸の集落で何年かやりかけたのですがつぶれてしまいました。結局、集落内の意識、民泊をやる家もてなしをしようと思っても、そうではない家庭の方が多いわけですから。そういう人は来た人に、「おまえ、どこから来たのだ」というような顔で対応したのでは、おもしろくないぞと、行かない方がいいということになります。私らも一番心配したのはそこだったのです。10軒ある中で6軒しか民泊の家庭がありませんので。「おまえたちが勝手に受けておるのだから、おまえたちが好きなようにしなさいよ。」というような形では、来られた方がこの集落に来て気持ちが悪くも癒せないということになります。集落の総会で、「せめてよその人を見たら朝晩のあいさつぐらいはみんなですててくださいよ。」ということをお願いしました。そしたら、「あなたの家に来られたお客さんに、これを食べてもらってくれ。」とって野菜を持ってこられる家庭もありましてね。今ではそっぽを向いたような感じの方は一切ありません。村の前の河川も、集落の総事で年2回は必ず刈るようにしています。そういうことができるようになりました。

委員 例えばこういうところをモデル地区にして、そういう受け入れる地域が中山間部であちこちにできればいいなあと。やはり鬼入道というのは名前が非常におもしろくてユニークなので多分発信しやすいというメリットもあったのだと思うのですが。そこをモデル地区として、そのノウハウを皆さんが習って、そういう地域がたくさん増えていくといいなと思いました。

委員 ええ、そうですね。

委員 それと、青谷地区の郷土館が昔から無料で非常にいい施設なもので、本当にできたときからしょっちゅう行かせてもらっているのですが。あそこの和紙というのは、非常に古くから、何ですか、あそこの高台のところがありましたよね、今……。

委員 旧青谷の方ですか、奥の方ですか。

委員 そうですね、あそこのちっちゃな和紙のお店が随分前からあるのですが、青谷の和紙というのは県内でのシェアはどのぐらいなのか。

委員 県内は佐治と青谷ですが、大体最盛期に24、5億あったと思うのですが、今は多分15、6億ぐらいまで県内の工業出荷額が落ちていると思います。そのうち、どうでしょうか、青谷が11、2億、佐治が3億弱ぐらいだったと思っています。

委員 そんなものです、今は。

委員 和紙の用途はある程度限られると思うのですが、今和紙がもてはやされるというのは、それを住宅に使うとか、いろいろ用途が非常に広がってきていますよね。ランプのシェードなんていうのもつくっておられますよね。結局、私たちの年代も含めて書道をしていない人間たちは、そういうものに非常に魅力を感じるのですよね。ああいうシェードが欲し

いとか、プレゼントしたいという思いがあって、ああいうものを例えばこれからただ黙々と古い伝統を守っていくというのではなくて、そういう方面にもちょっと広げられたらどうかなと思ったりするのですが。

委員 今、そういった形で数社が、全員がというわけにはいきませんので、佐治の佐治川さんは立派に書道の画仙紙を守っておられます。こういう方々がいらっしゃってこそ新しいこともできるわけで、でも今鳥取の和紙はかなり全国の中でも強い動きとして出ていますし。今度は因州和紙というブランドを地域ブランドで申請いたしますので、それと海外との交流なども、これもためにする交流ではなくて、私どももミラノに遊びに行ったのでも別に新聞に書いてほしいわけではなく、売りたい、機能的なものがずっと主流を占めていたのですが、ようやく世紀が変わったところから本物志向といいますか、いいものを大事に使いたいという中で和紙というものがもう少し産業として活躍できるのではないかなと。

部会長 そういう方策はあるでしょうか、どうですか。

委員 ええ。

委員 ありがとうございます。

部会長 そのほかに何か。

委員 問題は研究員が4名おりまして、市内の小学校、中学校、高校に出かけてやっています。それから、今年からですが、公民館単位でマイクロバスに来てもらっております。最近では宝木、富桑、それから湖南、面影というのが5月から....。

委員 これは学校の子供たちですか。

委員 いやいや、公民館単位ですね、佐治の方に。

委員 何人くらい泊まれるのですか。

委員 もう詰め込めば100人は泊まります。

委員 では小学校の1クラスや2クラスでも。

委員 ええ、大丈夫です。ただ、学校の方も非常に忙しい.....。

委員 学校自身がね。

委員 ゆとりの教育いっていても、どこにゆとりがあるのかなということですね。

委員 出張観望会とかね、それから市内の街頭でもやりますし、いろんなところでやっていますけどね。

委員 私は時々行くのです、佐治の奥なんかきれいですよね。青谷の奥もそうだけど。

委員 それはいい場所がありますから。

委員 国府町でも、河合谷高原なんかもね。

委員 どこもありますよ、それはどこにも、奥に行きさえすれば。

委員 もっともっと奥に行ってもいいし、そういうところにうまいこといけばこのグリーンツーリズムというのは。でも、戸数が余り多いといけないのかもしれませんがね。

委員 地域でそれぞれ魅力ある取り組みをされているのですが、それぞれは違っていますが、何か共通項といいますか、そういうものをくり出して連携した取り組みというか、情報発信をしていかなければいけないのではないかと思います。例えばさっきあった自然体験とか、体験学習とか、工房とか、みんな体験工房ですね。和紙でも工房がありますし、それから自然とか体験とか、そういう何かテーマがありまして、いろいろなものを統合して共通項をくり出して、連携した取り組みが大事なのです。それぞれはいろいろ頑張られ

るのです、これからも頑張ってもらえるのですが、やはり何か共通項をくり出して、そういう情報発信が大事なのではないかなと思います。そういうことをコーディネートされる方というか、そういう方もいらっしゃる、やたらに同じようなものを何かそれぞれが取り組んでも、ここの地域はこういうもので頑張るといって頑張るものをしっかり決めて、それを何かくっいたらどうかなと思うのです。それから、青谷で言っている、学芸員もやはり鳥取市から巡回して回られるとかということもやはり一つの手なのではないかと思えます。

委員 鳥取市の学芸員も大変忙しいそうですよ。

委員 うちはとうとう学芸員を1年に限ってということで、学芸員も含まれているから引張った。だってもう指定管理者ですからね、何年というのはできませんから。

委員 ああ、そうですか。それはいわゆる自立採算ばかり求めますと、では何のためにつくったのかという、税というものが何なのかというそれもやはりお考えいただきたいですね。

委員 鬼入道のオートバイはずっと毎年続けておられるのですか、今でも。

委員 そうです。今でも。春と夏と2回はもう毎年あります。

委員 大会だけではなく練習にも来ておられるのですか。

委員 ええ、日曜には適当に若い者が来ていて、わんわんわんわんって駆けずり回っていますよ。

委員 ちょっと忘れる前に言わせてください。地域づくりと関係がないことはない、あるのですが、用瀬の美成、河原から5キロほど智頭寄りに、以前はサービスエリアをつくるということでやっていたのですが、今はサービスエリアをやめております。そこで乗り降りできると聞いているのですが、姫島に。それで、乗り降りができるのはいいですが、地図に表示をするとか現地に表示をしないと、大阪の人に言いようがないわけです。

部会長 インターチェンジのところでしょうね。それ以外に乗り降りできる。

委員 できると聞いているのです。

部会長 インターチェンジ以外に。

委員 無料になったためにできると。それで、そのことが用瀬とか佐治に非常に大きい影響があるわけです。流しびなも恐らく関西から多く来られていると思うのです。お客さんが。それから、佐治の天文台にしてもそうです。とにかく地域の人にとっても非常に大きな影響がありまして、正式に言えなかったら、ちょっと小ぶりでもいいから……。

部会長 いや、それは堂々と聞いてみればいい。

津村企画推進部長 わかりました、それはまたちょっと調べてみます。

委員 そうするとぜひとも準備をしておいてもらわないと、地域づくりに影響する。

委員 それは大きいですね。

委員 忘れない前に言っておかないといけないと思って。

部会長 大体時間も来たようですので、今日のところはこういうことで。

事務局 また今日のお話の内容をまとめさせてもらって、御意見を出していただくということで、次回までに提出していただきたいと思えます。

部会長 やる気になるのをどう誘導するかということです。それに多少は予算の裏づけができるなら、あとはね。

津村企画推進部長 そうですね、各総合支所にプロジェクトチームをこしらえられるようにして、それから、さらに各公民館単位ぐらいでワーキングをやったりして、それぞれ地域

で活性化策を考えてもらうということで今やっておりますので。

部会長 それはかなりの箇所数を予定されるのかな。

津村企画推進部長 そのところはまた総合支所を中心にして、どういう格好でやったらいいかということも考えていただこうかと。

部会長 8ヶ所あるわけだけど、一応総合支所が中心で、今。

津村企画推進部長 まず中心で。一律で行政がこちらからどうしなさいということではなくて、それぞれの支所単位でどうしたら一番いいかということを考えていただいて、総合支所の職員がまず、そこから行こうかなという話を今やっています。モデル的なものはつくってありますが、それを出しますとまたそれが主導になってしましまして、考えていただけなくなるということになりますので、今支所にそういう格好で投げかけておりますので。

部会長 ありがとうございます。今日のところはこれで、しまわせていただきましょうか。大変長時間いろいろと御意見をいただきましてどうもありがとうございました。それでは次回はちょっと問題を整理させていただいて、またいろいろと御審議いただくようになると思います。よろしく願いしたいと思います。大変どうも御苦労さまでございました。ありがとうございました。